



祓い魔

nanosecond

何せ、怪談の多い学校だった。「学校の怪談」とか「本当にあったナントカカントカ」という本を子供たちは好んで読んでいたが、わたしたち教師にとっては「何だそれ」みたいなものだ。

地方都市の小学校、児童数ほぼ五百人。

子供たちの噂話がいつとき燃え盛り、沈静化していく。出て来る話はどれもこれもステロタイプだ。場所はだいたい決まっている。

トイレには花子さんがいる。

理科室には恐ろしい気配がする。

音楽室のベートーベンがこっちをにらんだ。

または、誰もいないのにピアノの音がした。

階段の踊り場の鏡に自分以外のものが映ったので、振り向いたらだれもいなかった。

わたしたち教師はそれを毎年のようになだめるのだ。

トイレで怪しい気配を感じて行けなくなった子供は、和式トイレに慣れていないことが多い。暖房機の運転音や、男子用小便器に自動的に水が流れる音にびくつく子は、もともと感覚が繊細だ。

音楽室は新任教師が夕方遅くピアノの練習をしているところを聞いて恐れをなした少年の妄想だし、ベートーベンの絵はただの紙である。視線恐怖のある子なのだろう。

階段の踊り場の鏡は、ちょっと怖い逸話が伝わっているのだから、伝説が作りやすい。この小学校で事故死した少年の父母が、学校に等身大の鏡を寄贈したのである。

ラテン語で「汝自身を知れ」と刻印された鏡は、子供にとっては呪文のついた魔法の鏡だ。友達を怖がらせてからかうために考案された話であることは明白だった。

この学校は以前、墓地だったというのもまことしやかに流されるデマであった。この場所は森林を切り開いて作った農地である。墓地だったことはない。また、戦時中に大きな爆撃があって人が大勢死んだとも言う。しかしここには爆撃などなかった。

また、教室も怪談のステージになる場合がある。空き教室などは格好の場所だ。彼らはひと気の無い場所にすべて幽霊を割り当てたいのだ。

忘れ物をとりに来た少年が暗い廊下を歩いていくと...などという発端も多い。教師もこんな話に真剣に対応したくないのだが、強く主張する子供が居るとなにか工夫せねばならない。

わたしにはちょっとした強みがあった。それは、「逆霊感」だ。もともと本気で信じているわけではなかった。だが、この「逆霊感」という言葉は子供を鎮め安心させるのにとっても効き目があった。

幼少のころから「幽霊を見る」という父親と接して来た。彼はもう毎年見るのである。「いま、来てたぞ」とか「今日見た」などと言うのである。しかし、娘のわたしはまったく見た事がない。

オカルトブームのころ、友達がコックリさんなどをやっていた。マンガではつのだじろうがそういう感じの連載をしていて、少し興味もあったのだ。

高校生の頃、毎晩出ると評判の家があった。友達と一緒に泊まりに行ったところ、全く出ない。しかたなく帰ったら、帰ったとたんに出たのである。

心霊スポットと呼ばれるところにもよく連れられていった。友人がオカルト好きだったのだ。しかし、何も無い。

ついに友人は「あんたを連れて行ったら出ないから、もう誘わない」と言った。その後、毎晩何か悩まされているという友人の家にしばらく滞在したところ、「あなたのおかげで安眠出来た。ありがとう」とまで言われたのである。

そこで、子供たちが幽霊騒ぎで興奮すると、この話をする事にしていた。出るという場所に行き、「わたしがここにいる限り、何も出ません」と断言するのだ。

そうすると、必ず沈静化するのだった。

これが十数年も続くと、自分でも半信半疑だったこのことを自身でも信じ始めていた。断言し続け、そこに行くと、不思議な事に幽霊騒ぎは沈静化する。そうした言わば「実績」がわたしを支え始めていた。

本当の所、幽霊の存在など信じていなかった。父が見たというものを否定するわけではない。彼には本当に見えるのだろう。

しかし、わたしという存在にとっては、幽霊は存在しないのだ。

子供たちの中で繊細な子供が見やすいと言うのは本当だ。脳の感知力がちょっと違うのだろう、と感じるときもある。たいていは錯覚と思っていたが、本当に見えてしまう子供もいるだろうと思った。

そんな子供でも、わたしがその場所に行って安心させると全く大丈夫になるのだった。

これが「逆霊感」というものなのだ、お金をもらわなくても霊を払ってしまうんだよと冗談に言っていた。

今の学校にはこの四月に移って来た。とにかく夏でもないのに怪談が多いのである。わたしは「実績」があるので全く動じなかった。節約意識の浸透した教師たちは夕方になると廊下を消灯する。暗くなってから教室に所用がある時、暗闇の廊下を行って明かりのスイッチを入れなければならないのだが、わたしは平気で暗闇の中を歩いて行く。

人のいない暗闇は怖くない。夜道は強盗が怖くてびくびくしながら小走りになるわたしだが、学校の中に何の脅威があるだろう。校内には善意溢れる教育者ばかりがいるのだ。

大体の怪談を退治してしまった六月に、受け持ちの二年生のクラスの木下きりこが廊下を走って来て、トイレ帰りのわたしにぶつかった。

「ほら！ 危ない！ 走らない！」と何気なく声をかけると、彼女は叫び出した。

「先生！ 大変！ ハサミ！」

「ハサミ？」

「のぶちゃんがハサミでケガしたよ！」

それは大変と教室にかけつけた。

休み時間の教室には5人程の児童がいて、「教室遊び」をしていた。他の児童は校庭でサッカーや縄跳びをしたり、図書室に行っているのだ。風邪気味の子や足をくじいた子が「教室遊び」

を許されていて、読書やお絵描き、折り紙などをしていた。

児童はみなひとところに集まってティッシュなどを出したり「大丈夫！」などと言って騒いでいる。

その輪の中に割って入ると、鹿田のぶえが指を押さえていた。顔色は真っ青である。

こういう時、子供はめったに泣かない。あまりにも驚くと人は泣けない。泣くのは、ショックを通り抜けて安心した時だ。わたしの顔を見てのぶえは泣き出した。

「どうしたの？」と言ってわたしは傷口を見せてもらった。

血がぽたぽた落ちていた。左手の人差し指の指先が斜めにえぐれて、5ミリほどなくなっていた。

「工作してたの」とのぶえは泣きながら言った。他の子たちが口々に「折り紙を切ってたんだよ」と証言する。

わたしはマニュアル通りに、出血している指の根元を自分の人差し指と親指ではさんで圧迫した。そのまま上に持ち上げ、心臓より高くする。ティッシュは周りの子供たちがいくつも差し出して来る。それに礼を言いながら傷にかかるくあてると、そのままのぶえを教室から連れ出した。

廊下に多少血がしたたったが、気にしている場合ではない。のぶえは泣きじゃくっている。階段をおりて保健室に連れ込むと、養護教諭が後を受け継いでくれた。

「先生、お家に連絡して下さい。これは縫わなきゃいけません」

「わかりました」

わたしは急いで職員室に行って電話した。のぶえの保護者はすぐ駆けつけるという。わたしも付き添う事にしたので、総務にクラスの自習体勢を頼んだ。予定通り、テストをするのである。

保護者が来るまでの間に教室に戻って、そこにいる4人の児童にのぶえの荷物をまとめて欲しいと頼んだ。わたしはこぼれた血を拭かなければならない。転々と椅子や机にしたたった円い血痕を丁寧に紙で拭き取り、そのあとを水拭きする。

終わったところに保健室に荷物を届けたきりこが「先生、のぶえちゃんのお母さんきたよ！」と知らせに来た。

のぶえの母は車でかけつけたので、同乗することにした。そのまま外科に行くと、すぐに4針縫われたが、何とか治療は終わった。待合室で母親に事故の経過を説明したところ、「まあ、ほんとうにおっちょこちょいで。すみませんでした。不注意な子でほんとうに」と恐縮している。わたしは胸をなでおろした。

「休み時間にハサミを使ってるのになぜ担任がついていないのか」と怒り出す保護者もたまにるのである。裁判に訴える者もいる。そんなことにでもなれば「休み時間担任がいない時はハサミ使用禁止」などというルールが作られかねない。今でもカッターは禁止なのだ。管理職もそれを心配しているので、担任がクラスを総務にあずけて病院まで付き添うのを迷惑がったりしない。

病院の外に出て学校に電話を入れ、タクシーで戻った。そしてタクシーの中でふと、考えた。あまりにあわただしく、つい失念していたのだ。

切り落とした指先はどうなっただろう。

5ミリ程度だから、拾って病院に持って行っても意味がないのはわかっていた。指を根元から切っていたり、関節ごと落としてしまっていたらすぐに拾って氷で冷やしながら持参するという知識はあった。だが、この場合は必要ないのだ。

教室の中を拭いた時、床にも、机にも、椅子の上にもなかった。

あれは、どこに行っただろう。

転がって教室のすみにあるのかもしれない。見落とした。

テストの間に総務に拾ってもらえるかもしれない。

わたしは携帯をとりだした。さっき電話したのでリダイヤルで良い。教頭に伝言を頼み、連絡してもらった。これで全部処理した。あとは怪我の状況を報告書に書くだけだ。

怪我をしたのは十時二十五分だった。記入しながら気がついた。左手の人差し指。はて。

のぶえは、左利きだ。

右手にハサミを持っていたのか。利き手ではないのに。

なんとも無謀なことをしたものだ。わたしはのぶえの学習する姿を思い出した。左手に鉛筆を持っていた。書き方の時も左手で書いていた。毛筆はまだ教えていない。

なんでまた、右手で。

だが、問いただそうにも、のぶえは帰ってしまっている。周囲の子供たちも「折り紙を切ってた」と言っていた。何か問題点があれば保護者が明日連絡して来るはずだ。

子供は、ひとりで作業している時よりも、集団で作業している時のほうが怪我をしやすい。ひとりだとやらないような無謀な行動を、集団の中ではやってしまう。

たとえば、普通に廊下を歩いていたのに、友達に会った途端、いきなり「ねえ、見て！見て！」と叫びながらくるくると回転して消火器に激突した子もいる。

友達の気をひこうとして階段を何段も抜かして飛び、頭を打って脳しんとうを起こした子もいる。彼らは「観客」に「うけよう」として怪我をするのだ。これは人間が「社会的動物」である証拠だ。極度に「社会的」であるために、自分を見失うのである。

タクシーが学校に着いた。もう三時間目は終わり、四時間目も終了間近だった。

職員室に報告に立ち寄るとすぐに教室に戻り、総務と小声で話した。

「無事に治療しました。ありがとうございました」

「テストは終わって、あそこに集めてあります。その後は読書をさせています」

「助かりました。で...見つかりましたか」

総務の温厚な男性教師はちょっと困ったような顔をした。

「机間巡視しながら探してみたんですが、全く見つかりません」

「...そうですか。わかりました。わたしも探してみます」

「子供たちに言うべきですかね」

「あまり言いたくないのですが、見つからなければ言うしかないですよね...」

「掃除で見つかるというのも困りますからねえ」

総務が立ち去った後、わたしはすぐに今日の予定であった算数の学習を始めた。十分くらいしかないので基礎的なものにとどめた。

普段通り四時間目が終わり、給食時間となった。

わたしはのぶえの怪我の話をもっと簡単に、ハサミの使い方に気をつけましようと呼びかけたが、まだ「指のきれはし」の話はできないでいた。四人のその場にいた子たちは興奮して「見た、見た」「知ってる、知ってる」と叫んでいた。

給食の準備の時に、うちのクラスでは机を対面させるように配置する。机を動かせば出て来る可能性は高い。床に目を光らせたが、残念なことにホコリやエンピツしか落ちていなかった。エンピツは名前のあるものは持ち主に返し、ないものは落とし物の箱に入れることになっている。

念のため落とし物の箱も丹念に見たが、ハンカチ、マスク、エンピツ、消しゴム、髪どめ、クレヨン、きれはし、メモ帳の断片くらいしかなかった。

けとばされてすみっこに落ちていることもある。テレビ台の下やゴミ箱の陰も覗き見た。オルガンもそっと持ち上げながら動かした。何もない。

ふと思いついてゴミ箱をふたつとも持って、ゴミを集積する場所まで行った。全く何も気付かず考えずゴミ箱に入れた子供がいるかもしれないのだ。

ゴミになっているなら別に心配はない。

そのまま捨てればよいだろう。

ふたつあるゴミ箱は、ひとつは「資源物」でもうひとつは「資源物ではないもの」だ。

いくらなんでも紙には見えないだろうから「資源物ではないもの」を先に調べよう。子供たちは「何だかわからないもの」は「資源物ではないもの」だと考える。それは大体正解だから、全く困らない考えである。

「資源物ではないもの」を一つずつ出して大きなポリバケツに入れていった。工作セットについていたモールの切れ端。洗濯バサミが砕けたもの。あまった針金。バラバラになった消しゴム。セロファン。割れたしたじき。曲がった画鋏。

すぐに終わってしまった。ここにはない。

仕方なく、もう一つを調べた。紙類が多いので全部広げて調べなければならない。くしゃくしゃのティッシュはちょっと苦手だ。どう見ても内容物は鼻水である。しかしこの作業も案外早く終わった。

見つからない。

わたしは当惑した。こうなったら子供たちに聞くよりほかはなさそうだ。しかし、どう聞けばいいのか。それとも、聞かない方がいいのか。

結局、聞かない事にした。給食時間中に教頭に相談したのだ。

今日び、担任はつねに外部から辛辣な批評を浴びる可能性がある。そもそも全ての人に好かれる教師などいるわけがない。また、そんな教師がもしもいたならそれは「洗脳」ではないかとも思う。八割がた好かれれば良しとしなければならない。うらがえせば二割以上に毛嫌いされなければいいということだ。

二年程前、前の学校の話だが、新卒の男性教師が入って来た事がある。すぐに「ジャニーズ系

のイケメンだ」という噂がたった。参観日は満員御礼である。PTAで新任挨拶をすれば「きゃー」と母親たちから声援が飛ぶ。親の影響力は絶大だ。母親の影響で子供たちにも結果的に好かれるのだ。

これは希有な例である。初対面でこれほど好意を持ってもらえるなんてことはない。特にわたしのようなベテランが転勤すると、「どんな人か不安だ」と思われるようなので、多少緊張する。特に今はまだ六月だ。四月に赴任してからまだ二ヶ月しかたっていないのだ。

わたしは子供からは嫌われていないと感じてはいたが、たとえ嫌われていなくても、足元をすくわれる危険は常にある。それを回避するには、管理職に責任を分散しておくに限るのだ。担任が一人で判断してよいこともたくさんあるが、判断に困ることは相談しておくのが良い。

「もう病院に行って治療もし、医師も必要ないということだし、保護者も問題視していない。なにかに紛れてしまったのだろう。作り付けの棚の後ろにでも落ちたのなら、探すのは無理だ。子供たちを動揺させることはないだろう」

というのが、教頭の判断だった。わたしもそれで構わないと感じた。出来る限りのことはしたのだ。

翌日からも多少は気をつけて見ていたが、やがて日常にまぎれて忘れてしまった。

一学期はそのまま過ぎ去り、七月が訪れ、あと二日で夏休みという日が来た。

学習内容は全部消化し、お楽しみ会と大掃除だけである。

そんな浮かれた日の昼休み、あののぶえがやってきた。

「先生、靴がない」

のぶえの治療はすっかり終わり、指の傷も癒えていた。

「外靴？」

「そう」

「今日は休み時間に外に行った？」

「行った。その時はあったよ」

「靴箱に入れたんだね」

「うん」

わたしはのぶえの靴箱を見に行った。のぶえもついてきた。

「他の子の靴箱にないかな。名前がついてる？」

「ついてる」

わたしたちは靴箱をすべて覗き込んだ。どこにもなかった。靴箱の上にもないので、踏み台に乗って眺めてみたが、全く見当たらない。

「しょうがない。みんなに聞いてみよう。探してくれるよ」

わたしはこんな事件を経験上知っている。「モノかくし」というものだ。ベテランはたいてい何度か遭遇する。見つからないこともあるが、たいてい見つかる。

五年ほど前に、ある子供の家の鍵が見当たらず、家に帰っても入れないといって学校に連絡が来た事があった。その時の担任の話をおとで聞いた。幸い、近所に住むアパートの大家が開けて

くれてことなきを得たが、当然翌日に話を聞く事になった。その子によると、首にヒモでいつもかけているのだが、体育の時間にしばらく友達に預けたのだが、その後すっかり忘れて帰ったという。

預けられた子は、ドッジボールを交代でやる間、確かに預かったが、体育館のステージ上にのせたまま応援していてそのまま忘れてしまっていた。ステージ上をすみずみまで調べたがない。

しかたなくこれもクラスの皆に言ったところ、「皆で探そう」ということになった。もちろん、そういう話になるように誘導したのだが。

ベテラン教師の知恵だが、これは教員の間ではある程度常識になっている。こうすれば見つかるのだ。教室中の大騒ぎになり、見つかるまでがんばらなければならない、となると、必ず見つかる。この時もその時は見つからなかったが、あきらめて下校したあと、「見つけた」という子があらわれた。

「ここにあったよ」と、廊下の配管点検口の金具を持って開けてみせたのだ。確かに、そこに鍵はあった。

「みんなが帰ってからもさがしてくれたんだね。偉いぞ」と褒めて帰宅させ、翌日クラスでも「〇〇君が見つけてくれました」と言ったものの、担任はわかっていた。

こんなところにあると知っている者は、犯人である。

軽い気持ちで隠したものの、あまりの大騒ぎに耐えきれなくなるということもあるが、見つけたらヒーロー、ということも関係している。その子は被害にあった子ととても親しい子であった。

子供の「仲良し」は本当に仲良しの場合も多いが、「気に入らない事」も結構ある。それを面と向かって言えないときや、自分が見下している相手に馬鹿にされたと感じると「モノ隠し」を行う事が多い。科学的な考えではない。カンのようなものである。

しかし、証拠があるわけでもない。さらに続かなければ教師は不問にふす。続けば放置出来ないので、釘を全員に差す。

「こっそりこんなことをする人はバレたら友達をなくしますよ。□□さんがあんまり素晴らしいのでねたましくなったようですね。□□さんは本当にいつも素晴らしいから先生もいつも褒めています。さあ、みんな□□さんを元気づけて支えてあげましょう。協力してくださいね」こんな話をすればイチコロである。

いじわるをすればする程相手の株があがるのでは、やる気がなくなるのである。大抵は思いつきでいじわるしているので、やめることができるのだ。

今回も、同じ効果を狙ったのである。

もちろん、かなり簡単に見つかる場所に隠された場合は通りがかりでも見つけ出せる。だから百パーセント犯人とは言い切れない。さあ、どこから見つかるか。

放課後になってやっと靴は見つかった。

ズタズタに破られて。

完全なものではなかった。片方の切れ端である。他の部分はずいに見つからなかった。「田のぶえ」と書いてある切れ端だった。用務員が傘立ての下から発見したのだ。

傘がたくさん忘れられていて、持ち帰るように呼びかけていたのだが、その下に入り込んでいた。

切り口はハサミのようだった。切れ味のいいハサミだが、何度もはさんだようにざくざく切っている。ハサミの刃の部分の長さは、丁度小学生用に売っているような小型のものを思わせた。

わたしはそれを見て少しぞっとした。随分性悪である。小学生のいたずらで刃物を使うのはかなり危ない兆候がある。「モノかくし」「靴かくし」も性悪だが、刃物を使うのはさらにパワーアップした悪意がある。

これは放置出来ないが、犯人はわからない。明日で終業式になり、夏休みが始まってしまう。しかしわたしが感じたのは、もっと理由の分からない妙な連想だった。

のぶえと、ハサミ。

あの指の切れ端は見つからなかった。

上靴の大部分も、見つからない。

切られて、のぶえの体の一部がなくなり、他方は残った。

切られて、のぶえの上靴の一部が見つかり、他方は見つからない。

子供たちの目前で見つかったわけではないので、わたしは靴の切れ端をそのまま職員室に持って行き、管理職に見せた。わたしの懸念や不安を誰かに話したかったということもある。

わたしはいままで、超自然現象など無縁だった。そういうテレビ番組を見ると、「また子供騙しの娯楽をやって金を稼いでいるな」と感じるくらいだった。実際そういうテレビ番組を見た子供が翌日に大騒ぎをするので、見ておく必要があるのだ。「ああ、先生も見たけどあれはね…」と話すことが出来る。

つい先日にも純朴な子が「知ってる？ 先生。△△年に人類は滅亡するんだって。テレビで予言があたるおばさんが言ってたよ」などと興奮していた。いつものように、過去にノストラダムス大予言に振り回された大人たちの歴史を話し、隕石は落ちてこないし人類もまだまだ滅亡しないと断言して安心させてやったものだ。

未来には滅亡が待っているなどと、生まれて十年にも満たない子供に信じ込ませて何の益があるというのか。

もちろん、科学は地球の終末を予言している。太陽が終末期を迎え、巨大に膨張をしはじめ、地球はその熱で蒸発し、太陽の重力の中にすべては飲み込まれる。太陽系はほぼ太陽とともに滅びる。だが、それは明日でも来年でも百年後でもない。

子供には、何かを怖がるということが必要だとでも思っているのか。

わたしが怖いのは、超自然よりももっと現実的なものだ。

どう見ても心に重大な病をかかえた子供が、この学校にいて、鹿田のぶえに何かをしている。

まずは、指の切れ端だ。次に上靴を。子供用のハサミがどちらにも関係している。

もちろん、証拠はない。いじめっ子が複数いて、入れ替わり立ち代わりまるでリレーのようにいたずらをするケースも、ないとは言えない。

だが...たとえば以前わいせつないたずら書きの事件があった時、筆跡から判明した犯人は同じ

クラスの最も仲のよい女の子だった。子供は短絡的に悪い事をするのが大半で、バレたらたいいてい「一番の仲良し」がやっている。

一般の人には理解してもらえないだろうが、子供にとっては簡単に愛は憎しみに転換される。そういう時は、クラスに犯人の発表などできない。悪質すぎるためだ。

当事者双方の保護者には連絡するがクラス全体には「犯人はつかまってものすごく叱られた。反省しているから二度としないかどうか先生が様子を見る。だから先生を信じて欲しい」と言って納得してもらおう。

あの事件でも、やったのは一人だった。悪質すぎる事件では、たいいてい犯人は一人だ。

わたしの直感は、これは尋常ではない事件だと教えていた。

だが、管理職二人に話すと、彼らは懐疑的だった。もちろん、靴の事件は重大だと感じていたようだった。しかし、指の一件と関連づけるのは少し待てということだった。もしも、執拗にいたずらを続ける者がいるなら、以後も何かをするはずだった。

「愉快犯かもしれない」という考え方だ。特に恨みはないがおとなしそうな子にいたずらをして、周囲が大騒ぎをするのを楽しむ、というものだ。この場合、ターゲットは微妙に変化することがある。

「子供のいたずらは場所につく」ということもあった。教室でいたずらする子は、教室で続ける。トイレでいたずらする子は、だいたいずっとトイレだ。靴箱でやる子もそうだ。

ふたつの事柄は場所が違う。一般的ではないのだ。

これを同一の子供がやっているとは言い切れないとも言える。

そう言われるとその通りである。自分が管理職でもそう言うだろう。

次の日は終業式である。夏休みに入れば子供たちのストレスはなくなってしまい、そのままいたずらが終わる事もあるのだ。

翌日、終業式が終わって教室に子供たちが戻って来た。わたしは言った。

「のぶえさんの上靴は見つかりましたが、ちょっと破れてしまっていました。いじわるをしている悪い人がいるようです。ただ、うちのクラスの人ではないかもしれません。のぶえさんがもう嫌な思いをしないように、新学期から靴箱の場所を入れ替えようと思います」

もちろん、わたしは違うクラスの子だとは信じていなかった。統計上、同じクラスである可能性は高いのだ。もちろん正式な統計ではない。教師たちの経験談を聞く限りの統計だ。

その後は普通に持ち物のまとめやプリントの配布に忙殺された。

のぶえは上靴を買ってもらうまでということで今日はスリッパをはいている。

休み時間が来た。わたしはのぶえがどこで遊ぶかに気をつけることにしていた。のぶえはおとなしい子だが、数人の仲良しがいる。男子とはあまり遊ばないが、グループで男子と協力するのはそつなくこなす子だった。

わたしはふと気付いて、教室の中央に集まってトランプをしているのぶえのグループに近づいた。

「ごめん、のぶえさん。あのハサミで指を怪我しちゃった時だけど、ハサミをどうやって持ってたか教えてくれない」

するとのぶえは言った。

「こうやって紙を持って、ハサミをこうやって」

わたしは目を見はった。のぶえは左手を怪我したのだ。だが、彼女の手の動きは、左手にハサミを持ち、右手で紙を持っていた。

「で、ちょっと目をつぶってえいって切ったら怪我してて、痛かった」

「あのね、右手でハサミを使った事ある？」

「先生、のぶえちゃんのハサミは左手用だよ。できないよ」

他の子供が指摘した。のぶえの母は右手用のハサミを使わせていないのだ。

「ありがとう。ちょっと書類に書かなきゃならなくて」

そうやってその場を離れた。子供たちはトランプゲームに戻った。

これは、何だろう。

教室は明るく、子供たちは笑って楽しそうにはしゃいでいる。明日から夏休みなのである。何の不安があるだろう。だが、のぶえは左手でハサミを持っていた。そして左手の指が切れた。器用な怪我だ。器用すぎる。不自然すぎる。不可能だ。その切れ端は、結果としてどこかにいった。

だが。

それが目的だったとしたら。

のぶえの指が欲しいということだったとしたら。

あの場にはのぶえの他に四人の親しい子供たちがいた。みな善良そうな子供たちだ。皆が向かい合うようにすわって折り紙でものを作っていた。何か異変があれば誰かが見ているはずだ。

だが...だが...

子供は、何かに熱中していると、どんな大事件も見逃す事がある。特に工作やお絵描きに熱中していると、隣の席で起こっている事にも気付かないことがあるのだ。

明るく、にぎやかな教室。

善良な子供たち。

だが、ここでのぶえの指は誰かに切られたのだ。そして上靴がずたずたになった。上靴の残骸はのぶえには見せていない。ショックを浮けたら困るという配慮だった。

わたしは不安で胸が苦しくなった。

超自然ではなく、現実にこの場所に意味不明な悪意が出現したのだと感じた。

誰がのぶえをターゲットにしてこんなことをしているのだろう。あの四人の中のどれかだろうか。だが、その子供たちはどうみても素直で善意にあふれているように見える。

とにかく夏休みというものがある。

のぶえにさらに悪意が向けられるにしても、当分は起きないだろう。警告のしようもないことだった。暑い日差しが窓から教室を照らしているのに、わたしはひとり、冷や汗をかいていた。

夏休みに入って、わたしはすぐに年次有給休暇を三日とった。早めの帰省のためである。お盆

に帰るとあちこちが混んでいるので、この仕事をしている者はお盆前に休暇をとって帰る事が多い。夏休みのせいか車の量が多いが、幹線道路の流れは良い。

父はお盆になると孫にいつもの心霊体験を聞かせて面白がっていた。兄夫婦が小学生の二人の息子連れてきていた。彼ら夫婦も教師をしているのだ。

わたしはのぶえの一件を話した。

生真面目な顔で父が言った。

「その子の指の肉はその日のうちにどこかに消えたんだよな」

「そう。ほとんどすぐに探したのに」

「ふむ！ それは誰かが隠したとしか考えられないだろうさ」

「わたしもそれは考えたんだけど、指の切れ端なんて隠すわけ...」

小学生の甥っ子が言った。

「きっと、食べちゃったんだよ！」

「おいしーい、パクパクってさ！」

「これ、何を言う」

わたしは幼い子供は何でも口に入れてしまうのを思い出した。

では、幼い無邪気な怪物がああ教室にいて、指を食べてしまったのか。見つからないのはそういうことか。

わたしの想像は瞬時にひろがった。その怪物はその指に味をしめて、今度のはのぶえの足を食べようとした。だが、それは足ではなく靴だった。怪物の歯はハサミだ。子供用のハサミ。それは子供なのか。子供とは思えない。

子供かもしれないが、わからない。

わたしは頭の中で堂々巡りが始まるのを感じた。

「まあ、夏休みで沈黙化するだろうよ。女の子がいじわるされるのは、たいてい仲良しの女の子の仕業か、好きなのにうまく表現出来ない男子の仕業かだよ」

兄がベテランらしい意見を言った。

子供が、指の肉を食べる？

のぶえが好きだから。

少女の切れ端が好きだから。

切断した体の、小さな切れ端と大きな切れ端。

小さい方はなくなった。食べられた。

大きい方は、のぶえだ。

子供が？

馬鹿な。

わたしは理由のない堂々巡りを打ち切った。だが、甥の言葉が耳を離れない。

「ところで...話は変わるけど、今も見ろ？」

我が家で「見る」と父に言えば幽霊話である。

「おお、見る見る」

「おじいちゃん、や〜め〜て〜」二人の甥たちが大騒ぎをする。さんざん聞かされているのだ。

「あっと、今聞きたい訳じゃないの。あのね、今まで見たのって何か共通点であったっけ。みんな知り合いとか」

「知り合いは結構あるよ。うーん、でも知り合いじゃないのも。いや、むしろ数としては知り合いじゃないほうが多いかな」

「あっやっぱり話す〜」甥たちがまた耳をふさいで大騒ぎをした。

「お前たちは聞きたいのかい、聞きたくないのかい。はっきりしなさいよ。聞きたくなけりゃ、あっち行ってりゃいいんだから」兄が言った。甥たちは母親がおやつをくれるというので、そっちに行ってしまった。

「わたしはね、見た事ないからわかんないんだけど」

「お前は幸せだねえ」兄がくすくす笑う。

わたしは兄の言葉に少し驚いた。

「お兄ちゃんも見てるの？ 知らなかったよ」

「お父さんとホテルなんか泊ったら必ず見るよ」

「何だ、俺のせいかな」

父は少し鼻白んだ。兄がからかっているのではないらしい。

「なんかね、慣れちゃってね。無害だし。大抵立ってるだけだから」

「座ってるのや、浮かんでるのもいるぞ」

わたしは気がかりな事をはっきりさせたかった。

「お父さんは、小さい頃からそうだったんだよね。知らない人の幽霊もたくさん見てるってことだよ。それで、その人たちが出る理由って分かる？」

「わかりっこないね」

「どうしてお父さんの前に現れるのかな」

「それもわからないよ。知らねえな。知ろうとしても無駄だろ」

「無駄…」

「そいつら自身だってどうしてそこにいるのか知ってるのかなあ。とにかく、話もしなけりゃ何もしないんだからさ」

「そこが西洋の幽霊と違うよな」兄が参加してきたが、わたしは無視した。

「とにかくね、ただそこに立ってるだけなんだ。たまに走ったりもするけどさ」

「走る？」

「えーと、あ、そうだ、こんなことがあったな。お前が小さい頃なんだけどね。公園にお前を連れて行って、俺は砂場にお前を置いてベンチにすわってタバコを吸ってたのさ」

「昼間ね」

「ああ、幽霊は夜昼関係ないのさ。で、ベンチでぼうっとしてたら、何だかレインコートを着た男が立ってるのさ。正面に」

「正面に」

「俺はああ、またかと思って特に何も考えてなかったな。晴天で、暑いくらいの日だったのさ。そしたら急にそいつが走ってトイレのほうに行ったんだ」

「ただの変態なんじゃないの」

「いやいや、そいつは半分透けてたのさ。いつもの感じだった。でも走って行くのは珍しい。そしたら、お前が俺のところきて『お水』って言ったのさ。お前には見えてないのははっきりしてたよ」

「はは、こいつから逃げたんだ。幽霊も逃げ出す猛女だってことだなあ」兄のからかいは気にならない。この話の根幹を言っていたからだ。

父は幽霊を引き寄せているが、父にとっては無害だ。だが、なぜ無害かはわからない。

わたしが行くと、幽霊は移動する。

兄がいると、父の影響を受ける。

わたしも、幽霊と関わっているではないか。わたしが気付いていないだけで。

だが、本当に幽霊なのか。

幽霊というのは死んだ人のタマシイだ。だが、そんなものだけが来るのか。

わたしの一家は、そうしたものの結びつきがあるのだ。超自然の扉を開けてしまうような。正があれば負がある。電池のプラスマイナス。磁力のN S。反対の性質を持っているわたしも、もともとは同じと言えるのではないか。

いままでの学校では、わたしの力で何もかもうまく中和出来ていたのだろう。

だが、幸運は続かないというものだ。相殺したはずなのに、何かが残った。

幽霊ではない何かが。無害ではない何かが。

わたしは久しぶりの家族の団らんに薄ら寒い恐怖を感じていた。

帰省が終わり夏休み中に学校の仕事をこなしつつも、のぶえの書類に記入する時に、考え込んでしまった。普通のサラリーマンの家庭で、両親は愛情をもって育てている。成績は中の上くらいで、友人関係も良い。そもそも他人とぶつかることを好まない。絵を描くのが上手で、工作も好きだ。将来の夢を書かせると「幼稚園の先生」などと書いている。去年は「お菓子屋さん」だったそうだ。

なぜこの子が狙われているのか理解出来なかった。いや、そもそもそれはわたしの考え過ぎで、それぞれの事件につながりはないのかもしれない。この曖昧な状態は、思い切った行動はとれないということを意味している。

だが、経験した事のない不安が沸き出してくるのを止める事ができない。

もしも、教室に何かあるのなら。

もしも、のぶえがターゲットなら。

のぶえは、幽霊を引き寄せているのかもしれない。兄が父と一緒に幽霊を見るように、誰かの影響下にあると、そういうことが起こるのかも。誰の影響下だろう。教室にはたくさんの子供がいる。誰か仲良しの子だろうか。だが確かめる術はない。

そして、そいつは靴の時には玄関に移動していた。わたしが動けばまた移動するだろう。わた

しは学校中を歩き回っている。仕事だから。今はどこにいるのか。

校外ではない。もしも校外なら、夏休み中に何かが起こって連絡が来るはずだ。

校内に違いない。

始まりは、いつか。あの指の事件の時だ。あの四人の中に、父のような者がいた。父の場合、幽霊は無害だったが、いつもそうだと言い切れるだろうか。西洋の幽霊のように騒がしく実体を持った者もいるのではないか。いや、もともとは無害な者が、きっかけを得て変化したのかもしれない。その原動力は...

指先の肉。

この夏休み中に、その怪物はその欲望を忘れるだろうか。それとも、飢えているか。

始業式に何か起きるかもしれない、と感じた。

わたしに本当に逆霊感があるなら、わたしがのぶえと共にいれば、何も起きないかもしれない。

始業式の日、わたしはいままでやったことのない事をした。玄関で子供たちを出迎えたのだ。のぶえが元気よく登校した。新しい上靴をもっている。わたしはのぶえに言って、わたしの靴箱に入れるように言った。気休めでも、良い。苦情が来ても構わない。わたしの逆霊感が、わたしの持ち物にまで及ぶという確信もない。ただ、そうしたかったのだ。

のぶえと共に教室に入り、なるべくはりついた。いつまでも続かないとはわかっていた。教室で他の子が突発事件を起こせば、その場を離れなければならない。しかし、自分の不安のために、努力した。他の子たちに気付かれないように。

あの「田のぶえ」と書かれた靴の切れ端を、わたしは封筒に入れてロッカーに保管していた。なぜか、捨ててはいけないように思ったのだ。誰か子供がやっていたとわかったなら、その子に見せて質問するためかもしれない。

子供の悪意にせよ、超自然にせよ、わたしがいれば何もしないはずだ。

チョークなどが足りなくなり、職員室にとりに行かなければならない時も、自分で行かずにその場にいる子に頼んだ。わたしに何か力があるなら、いまこそ使わなければ。

のぶえが下校するのを見送り、一息つくのが新しい日課となった。

十日程たったある日の朝、休みがちだった子の家から電話があった。「学校に行きたくないと言っているので今日は休む」というのだ。

この家はワケアリの家で、以前児童相談所に子供が預けられたことがある。虐待の疑いがあったらしい。学習道具はほとんどそろえておらず、鉛筆や消しゴムを毎日のように貸し出してやっていた。給食で栄養をとっているようで、何度もおかわりをするが、給食費はかなり滞納しているのだった。風呂にもあまり入れてないらしく、巡視をしている時に頭から異臭がたちのぼっていた。

近年の児童虐待のケースでは学校の対応が問題視されることもある。家庭訪問は断って来るし、参観も懇談会も来ない。個人懇談も全く来ない。「休む」という電話をしないと学校から問い合わせ電話が行くのでそれだけは欠かさない。こうした親はそれでも子供を愛していることも

あり、非常に対応が難しいのだ。

わたしは玄関に立つ時刻が近づいていたが、電話を切る訳にはいけなくなった。内容がおかしいのだ。

「うちの子は、怖いと言ってます」

「申し訳ありません。どの辺りが怖いのでしょうか」

「学校が怖いそうです」

「わたしの授業でしょうか。叱られて？」

「うちの子、叱られてるんですか？」

「いえ、叱った記憶はありません。真面目に学習しています」

「先生が怖いとは言ってません。先生は好きだと言ってます」

「では、友達でしょうか」

「喧嘩はしてないそうです」

「では…」

「教室に入るのが怖いんだそうです。何かいるって」

「何か…」

「子供が怖がるような怪談か何か流行してるみたいです」

「怪談、それは初耳ですが」

「先生、何とかして下さい」

「わかりました。ちょっとお子さんを出していただけますか。電話で話せますよね」

「構いませんよ。ほら、おまえ、出なさい」

母親に促されて、尻込みしていた子が電話口に出た。わたしは訳もなく動悸が激しくなるのを感じていた。大きな声で話すようにした。電話の異常な内容を、管理職が聞きやすくするためだ。机ふたつおいて、校長と教頭は二人とも耳をそばだてている。

「どうしたの。何か、怖いってお母さんに聞いたけど」

「怖い」

「何が」

「のぶえちゃん」

「のぶえちゃんが？」わたしはその名に胸の中が飛び上がるのを感じた。わたしは動転している。

「のぶえちゃんがどうしたの？ あなたに怖い事するの？」

「のぶえちゃんのそばに、ハサミが見える」

「ハサミが見えるって…落ちてるの？ 置いてあるの？」

「誰かが持ってるの」

「誰が」質問しながら、わたしは答えを聞きたいとは思っていなかった。

「誰か。わかんない」

「クラスの子？」

「大きい人」

「大きい？」

「見た事ない人」

「顔を見たの？」

「見えなかった」

「見えなかったって」

「隠してた。顔は見えない」

「ハサミはどんなの？」

「赤い。赤いハサミ」

「のぶえちゃんに何をしてるの」

「先生がのぶえちゃんに話かけたらどっか行くよ」

「でも、戻って来る？」

「うん」

「戻って、どうするの」

「ハサミをカチカチさせるの」

「カチカチって、開けたり閉じたりするの」

「うん。だから怖い。見たくない」

「他の子も見てるの」

「見てる子はいるよ。でも、のぶえちゃんは知らないみたい」

「いつから見てるの」

「ずっと前から」

「毎日見てるの？」

「ううん。時々。先生がいる時はいない。いない時に来る。最初は何も持ってなかった」

「今は？」

「いつもハサミを持ってる。昨日はふたつ」

「ふたつ？」

「両手に持ってるの」

「どこで見るの」

「教室。階段。廊下。ときどき玄関」

わたしはもう耐えられなかった。のぶえがもう登校して来る。冷や汗が出て来た。

わたしは今朝見たものを思い出していた。いや、見なかったものを。

出勤したとき、ロッカーを開けてバッグをしまった。あのとき、封筒が見えなかった。あの靴の切れ端が入った封筒だ。あの黄色い色は目立つ。ロッカーの中に黄色い色が見えなかった。絶対に見えなかった。あれは、切れ端を残すつもりなんかなかったのだ。

「ごめん。お母さんに代わって」

母親が電話口に出た。わたしは普段よりも早口で急いで言った。

「すみません、事情はだいたいお聞きしました。放課後、もう一度お電話します」

「よろしくお願ひしますね」

その時、廊下が騒がしくなった。これ以上ない程の凄まじい騒ぎだ。わたしは受話器を切った体勢のまま、凍り付いた。

大勢の子供たちが泣き叫びながら階段を駆け上がって来る。助けを求めて走って来る。

彼らは自分の見た物を口々に叫んでいた。職員室にいた教師たちは脱兎のごとく廊下にとび出して行く。職員室前で大勢の子が、一年生から六年生まで全員が凄まじい叫びを上げていた。

わたしはのぶえを守れなかった。

愛らしい子だった。何の不安も持ってはいなかった。なぜ、あの少女にこんなことが起きるのかなど、誰にもわからないだろう。

怪物でもないかぎり。

硬直しきった体をむりやり電話台から引きはがし、廊下の喧噪をかきわけて玄関に向かった。たしかに逆霊感があった。彼女を守る力をわたしは持っていた。この怪談の多すぎる学校の、あの教室に不可視の怪物がいた。無力だったはずのそれは、他の心霊をわたしが払ってしまったために、姿を現し、ついにハサミを持った。赤いハサミを。

教室で肉を味わい、玄関で待った。

のぶえの両親に説明できない。それがわたしに下された罰だった。予感がありながら幼い者を守れなかったわたし。だが、わたしはその小さな切れ端を見なければならぬのだ。

のぶえの、残された切れ端を。

了

祓い魔

<http://p.booklog.jp/book/89282>

著者 : nanosecond

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/nanosecond/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/89282>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/89282>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ